

情熱と受難¹⁾——ヘルダーリンの世界

平野篤司

1

ヘルダーリンのような詩人をどのように規定すればよいのだろうか。もちろんかれは、詩人という以外にはないであろう。だが、詩人という概念そのものを洗いなおさなければ、何も語ったことにならないであろう。さもなければ、「ヒューベリオン」に倣って言えば、詩人はいても人間はいないということになりかねないのである。ひよっとすると、「詩人の使命」²⁾を語って止まないヘルダーリン自身、詩人になろうとしたのではないかもしれない。それほど人間であることが重要であったのだ。

ここで人間というのは、神性を宿した、しかも十分な身体性を備えた地上の存在のことである。このような全体性は、魂という言葉でしか捉えようがない。魂という幾分危うい概念を持ち出さざるをえないのも、人間を全的存在としてとらえようとする詩人の法外な欲求に基いている。

魂というのは、たんなる抽象的精神ではないし、またたんなる心情でもなく、精神と身体の全てを貫く生命現象である。この意味で、ぜひミュージルの強調する魂を引き合いに出しておきたいと思う。百年を隔ててミュージルの追求したのもまさにこのような全体性にほかならないからである。「特性のない男」とは、魂を追い求め、自分のうちに人間の全体性を発見する者のことである。そして、この志向性は、ドイツ文学を貫く強力な原理だといえよう。ドイツ文学では、たんなる知性、たんなる感覚性、純粋に美的なもの、ひたすら現実的なものがそのまま肯定されることはまずありえない。つねに全体性への志向がぬぐいがたく認められる。ゲーテでも、ロマン派でもそうである。

だが、このような志向性は、容易に体系性を実現しない。真摯な探求の

軌跡は、断片と破片の集積、そして、夢のような無限性をあとに残してきた。ゲーテの「歴歴時代」でもカフカでもムーヅルでも、いたるところにそれは確認できる。そして、何よりドイツ哲学はそのような特性をもっていないだろうか。とりわけ、それは、美学の破綻において明らかだと思う。

ヘルダーリンは、その中でも最も真摯にして誠実な魂であったので、体系性の破綻は一番残酷な形で、しかも美しく顕現しているといえよう。それは、たとえばニーチェの批判哲学の比ではない。ゲオルゲに逆らって言えば、ニーチェは、やはり歌うべき人ではなかったのである³⁾。彼の本領は、トーマス・マンの言うとおり、批評という散文にあるのであり、詩ではなかった。それだけニーチェには精神的にそして対社会的にも余裕があったということである。ヘルダーリンは痛ましい。ヘルダーリンは、精神の揺籃期において、ヘーゲル、シェリングと交友を持っていたが、彼自身も出発点において文学ではなく、哲学を志向していた節がある。そのことは、若き日の理論的試みにも明らかであるし、何よりもその文学の支柱の一つを成すものであることは、まごうかたない。だが、同じく明らかなのは、その実現性の困難さと挫折感の深さである。これも若き日の論文の断片を見られるがよい⁴⁾。そしてまた、ヘルダーリンは、詩人の行き方を選び取ってからしぎりに哲学に対して自分の精神を締め付ける枷として苦情を呈するようになる。この点それと対照的なのが、何といてもヘーゲルであろう。ヘーゲルは、言うまでもなく哲学者として、また、社会人として大成功したのである。ただしそれは、生の全体性を一部ではあれ放棄した上のことである。ルカーチによればヘーゲルは妥協に妥協を重ねた上で見事な花を咲かせたのである。もし、ヘーゲルがまとめ上げたのが哲学であるならば、ヘルダーリンがそれに彼の人生を賭けるいわれはないのである。思想の形式上の美よりもかけがえのない生の現実があったのである。ヒュペリオンは、「たんなる悟性からは哲学は生まれない。哲学は単に存在するものの限られた認識以上のものだ」と語り、「崇高な多様の統一」⁵⁾を求める。もちろんヘルダーリンにも形式の統一性に対する強烈な意欲はある。だが、それは、人が生きる現実を十全に反映するものでなければな

らないというのが彼の立場である。いきおい形式は破られる。そして、ヘルダーリンもヘーゲルに劣らず、深く美の問題にかかわりつづけた。しかし、彼において美は破られることによって窺われるのである。たとえば、弁証法の実質はより鋭い形でヘルダーリンによって把握されていた。その説明に破綻があるとすれば、それは、ほかならぬ弁証法のはらむダイナミズムによるものである。論理の飛躍はそのままに鮮やかに形を残している。ヘーゲルは形式美の唱導者だったのだ。ヘルダーリンが要求したのは、哲学という領域の拡張と組み変えだといってよい。そして、それが現実的に不可能だとすれば、彼のほうが新たな領域を切り拓くよりほかない。

宗教にたいしても同様である。ヘルダーリンは、プロテスタント敬虔派の信仰厚いシュヴァーベン牧師の家系に生まれている。どうもこの風土は、のちのメーリケの例もあって、独特に濃厚な宗教的雰囲気があったようだ。幼くして父を失ったヘルダーリンは、母親の強い勧めもあってチュービンゲン神学校へと進む。当然のこゝのように聖職者になるはずであったのだ。だが、なぜか彼は、かたくななまでに牧師になることを拒みつづける。これには、母親の強すぎる要請に対するひそやかな、だが強力な反発もあっただろうが、それとともにキリスト教という宗教に対する根本的な違和感があったのではないかと思われる。ヘルダーリンは、キリスト教そのものを拒否したのではないだろうが、自分なりの組換えを要求したのである。その成果がたとえば「パンとぶどう酒」であったり「唯一者」であったりする。そこでキリストの姿は、敬虔な正統的信仰からすれば、目を剥くようなモローの絵にでもあるような奇怪な様子を呈している。なぜなら、キリストがディオニュソス神と重ね合わせられているのだから。ニーチェでさえなしえなかったような転換と融合である。

しかし、たぶん敬虔さという点では、これを凌ぐものがないとは思われないほどの清らかな魂をもったヘルダーリンがどうしてこのような異端的な離れ業をやったのか。ここにはのちのニーチェにも通じる原理的なキリスト教批判が潜んでいたと考えることはできまいか。キリスト教の特に敬虔主義に見られる人間の身体性および美的なものに対する抑圧的

な機制は、ヘルダーリンの素直に受け入れるところではなかった。もしそれをそのまま肯定してしまえば、自らの存在を否定することになったであろう。「意気沮喪」にあるようにこの上なく謙譲にして自己批判の激しいヘルダーリンではあるが、自己の存在そのものは、絶対的に肯定されなければならなかったのである⁶⁾。それは、神性を宿すものだからである。ヘルダーリンにあっても、キリストのイメージは実にこまやかに慈しみはぐくまれている。ただし、実定宗教をそのまま受け入れることによってではなく、組替えられ、変容されることによって、彼独自のキリスト像となっているのだ。これが、ヘルダーリンのキリストに対する敬虔さの証である。受け継がれてきた伝統のイメージをあえて壊し、組替えることによって、元のものに就くという逆説である。伝統あるいは古典の命とは、このようにして力強く生きていくものであろう。

2

神ということでは、ヘルダーリンの世界には神が満ち満ちている。もちろん、前面に出てくるのは、キリスト教の神ではなく、ギリシャ神話の神々である。絶対的な一神教ではなく、多神教の世界である。そして、それは豊穡な自然の世界の中に立ち現れている。キリスト教的な心を締め付けるモラルではなく、生命力と美がその原理である。キリストは、ディオニュソスでなければならなかったのである。これは、敬虔な人にしてはじめて成し遂げたキリストへの共感なのである。

ギリシャ神話は、ヘルダーリンの故郷と言ってもよいだろう。「アキレス」や「ガニューメド」のように直接神話の世界を取り上げたものから、神話の風土、文物、地名などを歌い上げたものまでギリシャの素材は枚挙にいとまないほどである。ヘルダーリンを惹きつけてやまなかったのは、ギリシャ古典の世界に見られる自然に根ざした生命力であっただろう。だが、不思議なことに、ヘルダーリンは、一度もギリシャの地を訪れてはいないのである。当時のヨーロッパの若きロマン派の詩人たち、たとえばバイロン、シェリーなども、折からの露土戦争もあって、ギリシャ、ローマ

に憧れやまぬ気持ちを抱き、古典の地へと馳せ参じている。こういった風潮の中で考えれば、ヘルダーリンのギリシャに対する熱狂も時代の刻印を明確に受けている。あえて憧れの地を踏まなかったのは、それだけかの地が聖なるものであったともいえようが、シラーにおけるスイスの湖の描写ともあわせてドイツ文学の観念性を物語ることでもあろう。しかし、ここにはただそれだけのこととはいえないより根本的な理由があると思えてならない。

3

たとえば、「マイン川」⁷⁾という詩は、明らかに詩人の故郷を流れる川を歌ったものだが、この詩の半ばまでは、スニオンの海辺、アテネの神殿、オリンピア、イオーニアと繰り広げられるのは、もっぱらギリシャの風土であって、マイン川はおろかドイツの風景の一片すら登場してこない。しかも冒頭に「やはり僕にも、幾多の国を見たいという気持ちがあるのだろう」といっている。詩人は、ここで自らを「故郷を持たぬ」「異邦人」と呼んでいるのだから、いずれの風景も相対化されるのは当然といえはいえるものの、前半部でのギリシャと後半のマイン川は、幾多の風景のうちの二つの例というほどのことではあるまい。それほど地名の喚起力が強いのである。そして、その二つの風景の結びつきにも、目覚しいものがあるといわなければならない。ヘルダーリンにとってギリシャとドイツという二つの風土は、ほとんど宿命的であり、そのつながりもそうである。

ヘルダーリンによってギリシャの風景が、そして神話と悲劇の世界が洗いなおされたといってもよいだろう。たとえば、詩「イステル川」⁸⁾によってその川は、命を吹き込まれ、ヘラクレスを客人として招く必然性を獲得し、これまでには見られなかったダイナミズムを帯びるのである。しかも、きわめて独特だと言わざるを得ないのは、ここにまたドイツのライン川が呼び込まれることである。

このことによって、ギリシャとドイツが一つの場に持ち込まれて、融合したということではないかもしれないが、とてつもなく大きな広がりを持

った世界が出現したことは、確かなことである。これは、ギリシャのほうからは、西方の精神によって目ざまされたということであり、ドイツのほうで言えば、東方の根源的生命力によって生命を更新されたということである。ヘルダーリンの風景は、二つの空間が一つになるというよりも、それらが二つのままに相互浸透しあい、パノラマのような重層的、立体的の世界を作り上げているのである。

ロマン派が彼方のものにあこがれ、それとの一体感に陶醉したり、それとの隔絶を嘆いたりという例はいくらでもある。しかし、彼方を彼方として捉えた上で、それにこまやかにして強烈なオマージュをささげるというのは、まれなことに違いない。それに加えてもうひとつヘルダーリンにあって独特な点を指摘しておきたい。それは、他者を見ることがすなわち自己を見ることがことになることである。ギリシャは、生命の根源を知らせてくれるかけがえのない土地である。だが、あえていえば、ギリシャを生かすために自らの拠って立つ土地ドイツがなければならぬのである。「マイン川」のなかで、詩人は、ギリシャの島々に向かって呼びかけ、「いかなる自由な大地も、祖国に代わって詩人に仕えてくれなければならぬ」といいながら、すぐ次に「美しいマインよ、おまえとおまえの幸多き海辺を夢にも忘れることはない」と続けて語るのである。ディオティーマは、ヒュペリオンに向かって「いつか、あなたが自然の内からいなくなれば、その時自然は欠片であって、神々しいものでも、完全なものでもないのです」⁹⁾と語っている。ヘルダーリンは、祖国という語を強いアクセントで用いることが多いが、自分が世界を見、それに働きかけるためにために不可欠のよりどころなのである。

ヘルダーリンの世界では、ギリシャは、ドイツの写し鏡である。ドイツを離れてギリシャを讃仰するということは原理的にないといってよいだろう。その意味で、彼は単にギリシャ文化の美的な享受者でもなければ、文献学者でもなかったのだ。ドイツの、そして近代の人々のあり方を問うといったきわめて批評的な態度こそこの詩人の本領である。彼の批評行為は、たんに対象を彼岸のものとして眺めるということにとどまらない。相手を

解明し、それがそのまま自己をも切り開く。自己を投入せずして外の世界は何も見えてこないのである。エンペドークレスがエトナ山の火口に身を投げたのは、自然を認識するためであったが、それはすなわち命がけで自己を知ることでもあったのだ。かくして、オイディプスの受難は、近代ドイツの詩人の運命として読み取られる。キリストの受難も同様である。すべてヘルダーリンが自己投入したことによって得られた栄光であり、悲惨であった。

舟人は穫り入れを終えて 遠い島々から
嬉々として故郷の静かな流れへと帰っていく、
わたしも、穫り入れた悩みほど大きな富を得たのなら
故郷へ帰りたいものだ。 「故郷」¹⁰⁾

彼方へと往くことと帰還することは一つのことがらの裏と表の関係である。愛することと悩むことも同様である。ここで、Passion あるいは Leidenschaft という語に注意してみたい。激しい愛、情熱は、すなわち深い悩み、受難にほかならない。ここには微温的な幸福は存在しない。

なぜなら、われらに天上の火を貸し与える神々は、
聖なる悩みをもわれらに送る。
だから、それはそのままであるがよい。地上の子である
わたしは、創られたのだ
愛するように、そして悩むようにと。 「同上」

4

「神々は、往時人々のあいだを歩んでいた」(「ディオティーマ」¹¹⁾) というのが古典古代から獲得した認識であった。ここからは、神々と人間が等しいという考えまであとひといきである。事実恋人ディオティーマは、「そ

の神々と同じだ」とたたえられる。そして、自分たちのことを後世の人々は「神々への道を見出した」というだろうと述べている。しかし、注意すべきなのは、詩人はあくまでも地上の人であるということだ。遠い彼方を夢想し、あわよくばその世界の住人になり果すことを考える者ではない。聖なる火を自らのうちに感じるのであれば、その視線はかえって現実へと向かう。これは当然自分にも向けられ、厳しい自己批判を生み出す。神々と、そして、自然と自分との絶対的な距離と隔絶を知らされ、絶望に沈むのだが、まさにこのような冷厳な自己認識こそ聖なる火を呼び寄せるのだ。ロマン的イロニーの一例ともいえるが、ムージルのいう「厳密さと神秘」¹²⁾ という普遍的な主題にも通底しているはずである。ヘルダーリンの熱狂は、大変な冷静さに裏打ちされている。それは、詩人自らいうように「聖なる冷静さ」¹³⁾なのである。

ヘルダーリンの批評の視線は、ニーチェのそれとも似てはいるが、それよりはるかに鋭く厳しい。両者ともそのドイツ批判は知られているが、ヘルダーリンが言語による造形家すなわち詩人であることによって、そして優れた精神的体力によって、より厳しく鮮やかなものになっている。

それにしても、ヘルダーリンのドイツ人批判は、厳しい。「ヒュペリオン」の終わりのところで主人公は、ドイツ人たちの中に降り立って愕然とする。ここでもやはり、ドイツはギリシャという鏡に映し出される。

「こうして、私は、ドイツ人たちのなかに入っていった。多くを求めず、ずっと慎ましいものに出会うのもよいというつもりでいた。謙虚な心でやってきた。故郷を失い、盲いたオイディプスがアテネの市門に近づいたとき、神々の森が彼を迎え、美しい魂の人々に出会ったときにように。

しかし、私の場合はなんと違っていたことだろう。」¹⁴⁾

近代のオイディプスは、はるかに悲惨である。壮麗な悲劇が用意されているわけではない。ひからびた荒涼たる精神風土の中を一人歩まねばなら

ない。だが、彼の心は、ひとり生きているのである。胸のうちには、ギリシャによって掻きたてられた生の充溢と美を抱きながら、荒涼とした風景の中でも、ある思い出や自然の風景に触れて、「自分の心臓はまだこんなに温かく打っているのだ」と感じ入る瞬間はある。このような状態で眺められたドイツは、その輪郭をいっそう鮮明にする。

「昔からの野蛮人たちは、勤勉と学問によって、また宗教によってさえ、いっそう野蛮になり、いかなる神的な感情も持ち得ず、聖なる美神たちの幸福を享受するには骨の髄まで腐っており、誇張とみすぼらしさのあらゆる段階でどんな良き魂をも傷つけ、投げ捨てられた器の破片のように鈍重で調和を欠いている。これが、わがベラルミンよ、私を慰めるものであろうとは。」¹⁵⁾

ここでいわれる野蛮人とは、啓蒙された近代のドイツ人のことである。彼らがより野蛮になるというのは、より近代的により文明的になるということなのだ。その現実が完膚なきまでにそのヴェールを剥ぎ取られている。「ヒュペリオン」で前提になっている時代は、18世紀の終わりごろ、広くとって1770年から1800年ごろであろう。ちなみに「ヒュペリオン」の完成は、第1巻が1797年、第2巻が1799年である。そうであれば、時代は、ヨーロッパの中で啓蒙主義の遅れは引きずりつつも、ドイツの市民社会はその興隆期にあったのである。文学史の上では、ゲーテの古典期の幕開けである。このような時代に、まだこれから上昇しようとする市民層のあり方に厳しく否を突きつけるというのは、市民生活のある種の完成形態であるビーダーマイアーを激しく斥けたニーチェにも通うものがあるだろうが、ヘルダーリンのほうかをはるかに大胆だったのだと思われる。上昇の気運の中に衰退どころか没落を読みとる感覚は、まぎれもなくドイツロマン派のものであるが、ヘルダーリンほどその感覚を全面的に生きた人もいなかったのではないか。19世紀という近代の命運は、既にその出発の時点で、敏感な感受性によって看破されてしまっていたのである。その意味でニーチェは、

後衛にあってその成り行きを再確認したに過ぎない。ヘルダーリンには、それ以後展開していく近代が確かに「貧しい時代」¹⁶⁾とみえたのだ。

5

ヘルダーリンにとって彼の時代と場所は、ゆるがせに出来ない唯一のよりどころであったに違いない。ヘルダーリンの詩の世界が、ギリシャであるとともに、ドイツがそれぞれ相半ばする風景であり、古典古代とともに近代であるのは、そのためであり、そのなかでギリシャは、ドイツの写し鏡なのである。もちろん、失われた美しい古代ギリシャをそのままドイツと見るのではない。ギリシャという鏡は、陰画のようなドイツの荒涼たる風景を映し出すばかりである。ギリシャの原像の鮮やかさに比べるのは、おそらく詩人の魂の深さだけである。

ヘルダーリンの魂に照り返されたドイツ人のありさまは見るも無残である。

「厳しい言葉かもしれぬ。だが、本当のことなのだから言うておく。私は、ドイツ人たちほど引き裂かれた民族をしらない。職人はいるが、人間は見えない。思想家はいても、人間は見えない。司祭はいても、人間は見えない。主人と下僕、若者と分別ざかりの人々はいても、人間は見えない。それは、流された血が砂の中にしみいる傍らで、手と腕、そして体のあらゆる部分がずたずたにされ散らばっている戦場のようなものではないのか。」¹⁷⁾

これほどの残酷な比喩をほかのだれが言いえたことであろうか。ムージルならば、特性だけはあっても人間のいない世界というところだろう。「特性のない男」というのは、ずいぶんひねった言い方であり、ヘルダーリンのいう人間にほかならない。ムージルの言い方は、ヘルダーリンに比べれば、ずっと知的に冷静であると思う。ヘルダーリンの感情は、憤怒に近く、情け容赦ない。

しかし、ヘルダーリンの祖国に寄せる感情を憎悪とってはならない。怒りと憎しみはまったく別物だからである。そもそも関心のないところに怒りが生まれるだろうか。ヘルダーリンの怒りは、激しい愛情ゆえの憤怒である。あまりにも激しい愛情は、相手を焼き尽くしてしまう。愛を注がれたほうは、幸福というよりは受難とすることだろう。あえていえば、神に打たれたヘルダーリンが詩人としてドイツ人たちを打ったのである。詩人とは、ここでは神の宿る器でなければならない。だから、これは、神の愛であり、叱責なのだ。その証として、熱狂した詩人は、同時にきわめて冷静に語るのである。彼は、人々の日常生活の怠慢を責めているわけではない。まったく別のものを要求するのである。それは、魂の躍動であり、生きているという感覚である。それには人間を超えた神的能力を受けていなければならない。そしてそれは、人々の日常を超えて、自然と通じ合っている。ヘルダーリンの打たれた神的能力とは、キリスト教というよりも、自然の風景と力を形象化したギリシャ神話の世界のものなのだ。だから、ヘルダーリンにおける聖なる領域は、実定宗教や秘教のように閉じて他者を排除するものではなく、痛々しいほど開かれたところなのである。また、この点が、ヘルダーリンが詩人であって、宗教者ではないという理由でもある。

聖なるものに打たれた詩人が人々に要求するところを聴いてみよう。

「たれでも自分のつとめを果たしているのではないかと君はいうだろう。はくもそう思う。ただし、全霊を傾けて励まなくてはならない。自分の称号にぴたりと合わないからといって、自分の内部のあらゆる力の息の根を止めてはいけない。小心翼翼たる心で、文字どうり欺瞞的に自分がそう呼ばれているものであってはならない。真面目と愛を持って、自分があるところのものでなくてはならない。そうすれば、自分のおこないのなかに霊が息づく。もし、霊が生きていることがまったく許されないようなところに押しやられたら、それを侮蔑をもって突き放すがよい。そして田野を耕すことに励むがよい。しかし、君のドイツ人たちは、必要最

低限のものに喜んでしがみついたままだ。だから、あんなにも鈍重な仕事ばかりで、自由なもの、真実喜ばしいものはほとんどない。にもかかわらず、もし、そのような人々が全ての美しい生命に対して感じることはないわけでさえなければ、神に見捨てられた不自然の呪いがいたるところでそのような民にかかることさえなければ、それも耐えしのんでいけるだろうに。」¹⁸⁾

ヘルダーリンは、ここで霊と訳したところに Geist という語を用いているが、これは、ヘーゲルのいうような精神という意味と同じとは思われない。人間固有のものというよりも、原理的に人間を超えた生命の根源にかかわるものである。これに人が触れるとき、逆説的にも人は最も人らしく生きられるのである。その意味で、この語は、Seele「魂」に通じている。19世紀が幕開けするところでヘルダーリンは、Seele「魂」の喪失を嘆いていたのだった。ムージルが百年の年月を経て相変わらず追い求めていたのがやはりそれなのである。人々は、もはやたんなる特性や能力の担い手に成り果ててしまったのである。ヘルダーリンは、人々に全霊を傾けること、すなわち愛を求めている。それは、「美しい生命に感じる」ことでもある。こんな原初的なことをかくも直接的に力強く語った例はほかにないであろう。しかし、ヘルダーリンは、絶望の認識の中で希望を語るのを忘れてはいない。彼の希望のよりどころは、もちろんドイツ人一般にあったのではなく、聖なるものを感じる人々の感覚であったと思う。それは、なによりも確実に詩人の魂において実感されたのだと思う。美しいギリシャは、そのような魂によってのみ感得される。それゆえ彼は、「彼ら（＝古代ギリシャ人たち）がなしたことで、魂なくしてなされたものは何もない」¹⁹⁾といえたのである。この確信をもって、詩人は近代のドイツ人たちを叱責する。

しかし、近代という窮屈な時代、ドイツという生気を欠いた風土にも詩人に安らぎを与え、勇気づけるものがある。それは、故郷の自然である。近代において、神の宿りうるところは、人々の心が涸れてしまっているの

だから、自然を措いてほかにはない。詩人は、自然と限りない宥和を感じるが、それは、詩人も神々のよってたつ自然とその魂によってつながりをもっているということだ。だから、自然が詩人を通して神々のように人々を裁くこともある。

「神聖な自然よ、おまえは裁くことがあろう。というのも、この人々が謙虚であってくれさすれば、彼らのなかのより優れた人々に対して、自らを掟と成すことがなければ、自分たちとは異なるものたちを冒瀆することがなければよいのだが。冒瀆することがあっても、神的なものを貶めることだけはなければよいのだが。」²⁰⁾

「おまえたち（＝人々）は、自然を辱め、引き裂く、辛抱強い自然は、おまえたちのやることをじっと我慢している。だが、自然は生き続けるのだ。かぎりない若さをもって。おまえたちは、自然の秋を、そして春を追い払うことは出来ない。自然の天空を追い払うことはない。

おお、おまえたちが壊すことを許されているにもかかわらず、年老いることなく、おまえたちの存在にもかかわらず、美しいものが美しくありつづけるのだから、自然は神々しいに違いない。」²¹⁾

このような言い方は、もちろん自然の力強さへの賛美と信仰から生まれるのであろうが、ある意味では、人間への愛情告白と読めなくもない。人間に自然に向かって自らを開くべく要求しているのだ。少なくとも詩人の表現の強度が読み手に伝わったとしたら、詩人は最大限の仕事をしたことになるのである。

ヘルダーリンにとって自然といえば、当然ドイツの自然である。「ハイデルベルク」、「ネッカー川」、「シュトゥットガルト」、「ライン川」、「ドナウの源で」など、詩人の祖国の風景の鮮やかさは、ギリシャのそれに決して劣るものではない。これが、風景に対する、そして人々に対する愛の感激でなくてなんであろう。

ヘルダーリンの言語は、極端といえるほど強度が強い。だが、自然の力

が、詩人の意欲を超えて、まさに自然として作用するとき、その強度は破られないにしても、より融和的な面が開かれてくるというのも事実であろう。そのような折もらされるひと息は、人為と自然のこの上ない幸福な調和と静謐をもたらすのである。

うまき酒が、鐘や琴の冴え冴えとした響きとともに
憂いに沈む者たちを目くるめく乱舞へといざなう
ころともなれば、ああ、そのときこそ黄金の秋は
貧しい民のため息を歌にかえることだろう _____「マイン川」²²⁾

詩人に自然の恵みがもたらされる瞬間がある。それは、奇跡のように生じている。しかし、その前に、彼は人間として可能な魂の最大限の振幅を持って地上の生を生きるのである。そのような努力に自然が、あるいは神々が応えてくれるなどという予定調和の約束があるわけではない。だが、熾烈な希求の心と努力なくしては、何も起こらなかったのだと思う。なぜなら、自然と人為の呼応と応答こそ、われわれが望みうる最高の美なのだから。

注

- 1) Passion, Leidenschaft いずれも情熱であり受難である。
- 2) Dichterberuf という題の詩がある。
- 3) ゲオルゲは、詩「ニーチェ」において、「語るべきではなかった 歌うべきであった この新しい魂は」というのだが。
- 4) Johann Kreuzer 編の「理論的著述」(Theoretische Schriften) Hamburg 1998などを参照
- 5) Friedrich Hölderlin: Hyperion
- 6) 同じ詩想から発した全く性格を異にする二つの作品 Blödigkeit 「意気沮喪」と Dichtermut 「詩人の勇気」がある。
- 7) Hölderlin: Der Main
- 8) Hölderlin: Der Ister
- 9) Hyperion

- 10) Hölderlin: Die Heimat
- 11) Hölderlin: Diotima
- 12) Genauigkeit und Mystik: Robert Musil, Der Mann ohne Eigenschaften
- 13) heilignüchtern: Hölderlin, Hälfte des Lebens
- 14) Hyperion 第2巻の終結部
- 15) 同上
- 16) ...und wozu Dichter in dürftiger Zeit: Hölderlin, Brot und Wein
- 17) 注14参照
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) 同上
- 21) 同上
- 22) Der Main

